

JIA news kinki

翔

syo

no.103/2007

夏号





表紙写真：
水墨画「碧 Heki」 大江 一夫

表紙解説 - 碧 Heki

水と紙、そして墨のみで無限の可能性を表現する。
生命の息吹の存在を感じ、
遠い底から響いてくる大自然の深い感動を、
そして永遠なるものを問い続ける。

CONTENTS

特集

- 「建築家資格制度」についての
現状報告と今後の展開 橋本修英 3

情報

- 新入会員紹介
「編集後記」 太田恭司 12

連載

- 「和のこころ」 益田治子 5
「住宅部会通信2007」 吉羽裕子 7
「建築家の視点」 豊辺弘也 8
「都市点描」 三好庸隆 11

「建築家資格制度」についての 現状報告と今後の展開

橋本修英
(前本部実務委員長)
(アーキテック)



現状報告

試行開始後3年間で認定者総数は2,526名となり、会員の半数以上が登録建築家となった。また、今年3月の第一回更新には該当者1,063名中972名が更新申請を提出、順調な滑り出しを見せた。しかし、本制度の根幹である実務訓練コースは、実務訓練生54名、認定者1名という状況で低迷している。

社会的には、試行3年の間に専攻建築士制度やAPECアーキテクト制度が創設され、また耐震偽装事件とそれに伴う建築士法の改正など、本制度に影響を及ぼす事象が多数発生した。JIAは新たに制定される専門資格の中に登録建築家の職能理念である「設計・監理の統括者」の専門資格を織り込むように主張したが、結果的には、構造・設備の専門資格の導入での決着となった。このような中、「2007年度総会をもって試行という文言を外す。1年を目処に第2ステップへの準備を行い、2008年度総会承認を得て社会制度段階へ移行する」という提案が今年4月の理事会で議決され、5月の総会で承認された。以上の状況を踏まえて、本部実務委員会は試行3年間の総括を行い、第2ステップへむけての制度整備を開始した。

試行の総括(要点)

1. 建築家資格制度の理念の再検証と登録建築家の位置づけの再構築

建築家資格制度の基本理念は「日本の建築資格の国際化」と「消費者保護」であり、登録建築家の職能理念は「設計・監理の統括者」である。

試行はこの理念を建築界に浸透させるべく、各団体との連携を図りつつ取り組んだ。その中でとりわけ重要であったのが(社)日本建築士会連合会の専攻建築士制度との関係で、「認定基準の統一」と「共通の第三者認定機関創設」を含む発展的統合をめざして2年間協議を重ねた。しかし士会の考え方は変化し、「統括建築士」は「設計専攻建築士」に、「資格制度」は「表示制度」となり、「共通の第三者認定機関創設は当面行なわない」という考えが士会から表明された。両会の考え方の差異が明らかになるとともに協議は中断され現在に至っている。

また、この間に、姉齒元建築士による耐震強度偽装という衝撃的な事件が発生し、建築士法が全面的に見直されるという急展開があった。結果は、建築士制度の中に専門家責任を明示するための専門建築士(構造・設備)の導入という形でほぼ決着したが、その中に「設計監理全体を統括する専門建築士」というJIAの主張を織り込むことはできなかった。このような現状を踏まえ

て、もう一度「制度の基本理念」と「登録建築家の理念」見直し、他制度との関係も含めて制度全体を再構築する必要がある。

2. 実務訓練コースの整備と拡充

本制度の根幹は「実務訓練による建築家教育」「試験による審査・認定」「CPDによる資格の更新」である。その第一段階に当たる「実務訓練」の実効性を実証しないかぎり本制度の法制化はありえない。そのためには「実務訓練コース」の整備と拡充を図り、1,000名規模の実務訓練を実施する必要がある。

3. 継続職能開発(CPD)の制度一元化

現状では、JIA会員の「努力義務としてのCPD」と、登録建築家の「更新必須要件としてのCPD」が並存しており、会員、登録建築家双方に混乱が見られる。この二元性から生じた混乱を解消するためには、CPD制度の一元化を図らなければならない。

4. 基本綱領・規定・基準等の早期整備

試行3年の間に、認定登録建築家に関する社会的トラブルも散見された。建築家資格制度を社会に信頼される制度とするには、基本綱領、倫理・懲戒規定等の整備が急務である。

今後の展開

第2ステップへ向けて制度全体の再構築を図るために、資格制度推進会議の中に「資格制度検討WG」を7月6日に立ち上げた。鬼頭評議会議長を筆頭に、野々瀬実務委員長、高野CPD評議会議長、大沢実務委員、圓山副会長、近畿支部からは、松本理事、荒川実務訓練部会長、橋本という構成である。

第1回の会議では各委員の役割とスケジュールを決定した。鬼頭議長には資格制度の今後の方向性、野々瀬委員には登録建築家の位置づけと基本綱領、高野委員+松本委員にはCPDの一元化、荒川委員には実務訓練コースの整備、大沢委員には規定類の整備、米沢委員には認定試験問題の作成、圓山委員には各支部との意見交換、私は組織・財務の整備とWG主査という役割分担をした。年内に会員に中間報告を行い、2008年総会で第2ステップの運営方針の承認を得て、2009年3月には新たな認定基準で会員外の申請者も含めて認定審査を実施する予定である。

日本の染織品にみる和のこころ

益田 治子

(グラス絞り染工房)



日本には、古代より大変みごとな染織品が存在している。それらの染織品において、和のこころはどのように表現されているのであろうか。日本の染織品における文様表現に焦点をあてて、和のこころについて探ってみることとしよう。

日本において、和様美が大きく華開いたのは平安時代を迎えてからのことである。和様美が生まれる以前は唐様美の世界であった。それは正倉院の宝物から伺い知ることが出来るのである。

正倉院には数多くの染織品が現存している。奈良時代は周知のように中国の唐の影響を受けていたため、染織品の文様にも唐様の姿が見られる。それでは実際に遺品を伺ってみよう。「琵琶袋残欠」(図1)は、琵琶の袋である。中身の琵琶と一緒に中国から舶載されたものと考えられている。袋の中心には、大きな宝相華文様が織り出されている。そして文様は線対称である。宝相華は空想上の植物であることから、この裂の文様における意匠は空想的植物文様であり、構成は左右対称であるという唐様美の特色を見出すことができるのである。

次に、「縹地唐草花鳥文夾纈縹」(図2)を取り上げてみる。これは夾纈によって染められた裂である。夾纈とは木を彫って作った型と型の間に裂を挟み、文様を染め出す染色技法である。用途は不明である。

『正倉院目録』注 二 に、

色調、文様ともに優美で、唐風の豪華な意匠が多い正倉院文様のなかでは異色というべきで、九世紀以降のいわゆる和風文様の萌芽を思わせる。

と記しているように、正倉院において大部分の染織品が唐様美の世界であるなかで、和様美のほのかな芽生えを感じる一例である。

平安時代前期に入ると、文献上で伺えば、律令格に対する施行細則を集大成した古代法典の一つである『延喜式』に見出せるように、奈良時代の唐様の伝統を受け継ぎながら新しい和様の様相が顕著に現れてくるようになる。やがて平安時代後期になると、和様の完成と展開をみるのである。平安時代における染織品の数少ない貴重な資料から、平安時代後期の作である四天王寺所蔵の「懸守」(図3)を伺ってみることとしよう。これは聖徳太子御所用の品として、人々の信仰を集めた七懸ある懸守の内の一懸である。懸守とは、魔除けや災難除けのために神仏の護符を納めて身につけた守袋で、平安時代の中頃より、特に女性が外出するときに胸に懸けて用いた。その後は次第に装身具とされたが、これは実用されたものであり単なる装飾ではなく、本来の宗教的な意義をそなえたものとして知られている。この懸守の形体は桜形をしている。桜の花びら一枚ずつに、異なった文様の錦を



図1: 琵琶袋残欠
文96.0 幅48.0 奈良時代 8世紀 正倉院
出典: 『正倉院展目録』平成11年10月25日
p50より



図2: 縹地唐草花鳥文夾纈縹
縦20.9 幅22.2 奈良時代 8世紀
正倉院 北倉
出典: 『正倉院展目録』平成12年10月27日
p88より



図3: 懸守
高6.0 幅6.5 平安時代後期 四天王寺
出典: 『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』
p70より

和のこころ

表貼している。更にその上に、金工技術による金銀の飾り金具によって、桜の枝を這わせている。ここでは錦ではなく、金具で施された桜に注目したい。桜は春になると咲く植物であることから、桜文様の意匠は、実際に目に触れることの出来る現実的な植物文様であるといえる。そして画面全体に生き生きと配されている枝は写生的であり、変化に富んだ動きのある面白さに満ちている構成は、非対称であるという和様美の特徴を示しているのである。

ここで、先に挙げた唐様美と和様美との比較を試みしてみる。そのことによって和様美の特色が明確になるのである。奈良時代にみられた唐様美の文様は、空想的意匠であり、左右対象の構成を示す閉鎖的な世界であるが、平安時代後期の作例に見出せた和様美は、親近的で平凡な意匠を好み、現実的な主題を写生的に捉えている。そして非対称の構成によって動勢あふれる開放的な世界を表現している。このように比較をすると、おのずから和様美の性格が伺える。和様美とは日本の四季に美を見出し、四季によって育まれた美の世界であるといえるであろう。

平安時代から時代が移り変わっても、和様美の伝統がみられる。その姿を実際の遺品から伺ってみよう。「段草花文様繡箔小袖」(図4)は、桜、藤、紅葉、雪持笹を春夏秋冬の意匠として四つ替に配している。めぐる季節への関心が伺える、刺繍と箔による小袖である。「銀杏葉に雪輪文様胴服」(図5)は、幅広い斜め縞の上に、辻が花染めで銀杏葉と雪輪をあらわしている。胴服は桃山時代の武将たちが羽織った衣服である。秋と冬の主題から、季節の推移を物語っていることがわかる。これらはいずれも桃山時代の遺品である。時代と共に、装束の形体や染織品に用いられる染織技法も、変化していくこととなるのであるが、染織品の文様において和様美は現代に至るまで受け継がれているのである。

日本の染織品において、和のこころは和様美というかたちで現れているのではないだろうか。更にいえば、和のこころとはすなわち、四季をこよなく愛する日本人の心なのである。衣食住の衣にあたる服飾文化の中で、染織品における文様表現という一部分を取り上げてみても誠に豊かな和のこころが読み取れるのである。

注 平成12年



図4：段草花文様繡箔小袖
文132.5 桁58.5 桃山時代 16世紀
京都国立博物館
出典：展覧会『花洛のモード』p35より



図5：銀杏葉に雪輪文様胴服
文115.2 桁57.9 桃山時代 16世紀
京都国立博物館
出典：展覧会『花洛のモード』p52より

参考文献

図録

『日本国宝展目録』	昭和51年	読売新聞社
『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』	1992年	「四天王寺の宝物と聖徳太子信仰」実行委員会
『正倉院展目録』	平成11年	奈良国立博物館
『正倉院展目録』	平成12年	奈良国立博物館
『花洛のモード』	平成11年	京都国立博物館

雑誌

週刊朝日百科『日本の国宝』通巻1139号 1997年 朝日新聞社

京都の近代建築を訪ねて

吉羽裕子

(吉羽裕子建築研究所)



京都の近代建築の代表ともいえる2ヶ所の見学会は梅雨の晴れ間に恵まれ、限定20人の参加で開催された。

ヴォーリス設計の大丸ヴィラ（昭和7年京都市登録文化財非公開）は元大丸社主下村氏の邸宅として建てられ、その後迎賓館としても使われてきた。急峻な屋根勾配が特徴的なチューダー様式で、煉瓦や石をはめ込んだハーフティンバーの端麗な外観である。内部も美しいプロポーションでデザインされ、玄関ホールの重厚な古樫の階段、各室の浮き彫りを施した羽目板張りの壁、鍾乳洞をイメージした漆喰仕上げの天井、石敷や無垢板張りの床、家紋をデザインしたステンドグラスの窓や打ち抜きの格子をはめた玄関の扉、部屋ごとに個性的なデザインの石造りの暖炉など、丁寧な手作りで質感の高い落ち着いた居心地のよい空間が広がっていた。部会員の石井氏による建物の詳細な解説とヴォーリスの人となりについてのたいへん興味深いお話をうかがうことができた。

京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター（昭和5年国登録有形文化財、武田五一、東畑謙三設計）は当初東方文化学院京都研究所として建設され、東洋文化の研究の拠点として東洋風を加味したスパニッシュミッション様式でまとめられている。外壁は白で軒や窓廻りには縁飾りが施されており、屋根はスペイン瓦型で葺かれているが焼きはいぶしで京都の街並みにも配慮されている。睡蓮の池と井戸のある中庭を巡るスペイン風の回廊は京都の寒さ故ガラス戸で仕切られている。中庭を囲む研究棟の屋根は二重の屋根になっているが当初2階建てにする予定が変更されたとのことである。内部は高い天井のロビーは東洋をモチーフにした連子が美しく、当初の家具がいまだに使われており、ステンドグラスのある階段、コルク貼りの天井の図書閲覧室、鉄製のデザイン格子の手摺がアクセントになっている三層吹抜けの書庫、見晴らしのよい塔とバルコニーまで、研究所の担当の方による丁寧な解説とご案内をいただいた。

このような美しい建築が今後とも活用されながら保存維持されればと思った。



大丸ヴィラ西側庭園より



人文研附属漢字情報研究センター外観



人文研附属漢字情報研究センター中庭



人文研附属漢字情報研究センター図書閲覧室

保存再生の手法 東京大学本郷キャンパスに見る

豊辺弘也

保存再生委員会
(豊辺建築事務所)



本年2月17、18両日、関東甲信越支部保存問題委員会主催の保存問題東京大会が東京大学本郷キャンパスを会場に開催された。初日だけ参加したが、プログラム冒頭に1時間半のキャンパス・ウォッチングがあり、構内各施設の多種多様な保存再生の態様が見学できた。大学に保存再生は不可避の命題で、新築・増改築とも独個の問題では済まず、周辺や全体との調整など都市的な視点が不可避、研究の対象には格好の存在といえる。

本郷キャンパスの現配置は関東大震災後の復興計画による。内田祥三建築学科教授を中心とするスタッフにより、安田講堂（'25内田祥三、岸田日出刀）など既に施工中の建築も取り込み、正門と講堂を東西に結ぶ中心軸の南北に主要建物を配置する構想が固まった。教室棟の基本形はB1+3FのRC、SRC造で左右に2本の4層分吹抜ポイドを持つ横「日」字型プラン、淡褐色スクラッチタイルの外壁にペディメント付ポーチを持つ通称「内田ゴシック」と呼ばれるデザイン。戦前までにほぼ主要部分は完成をみている。

戦後の新制大学への組織改変に伴う新增設は、既存様式をそのまま踏襲する方法で整備が行われた。高度経済成長期に入り関係施設の急速な拡大需要に対しては、既存環境への影響が比較的少ない工学部北側の外周道路沿いにコンクリート打放しの高層建築群が建設された。教授建築家たちを中心とした保存再生問題に正面から取り組みつつ、既存区域の再活用に回帰するのは1970年代以降になる。

正門左側の本郷通沿いの工学部11号館（'68吉武泰水）は褐色タイル貼り9階建、3層分の低層部は広場を囲む同1号館とスカイラインを合わせる配慮が見られる。龍岡門内側の本部棟（'79丹下健三）は隣接の理学部5号館（'76同）と共に、建物四隅に内田モチーフの8角柱を使ったメガストラクチュアの褐色タイル貼り。この建築家の見慣れた作風からは異質感があるが、前面道路東側の広報センター（'26岸田日出刀）への表敬の意を示しているのかも。総合図書館玄関を挟む東西両側の文学部3号館と法学部4号館（'87大谷幸夫）は周囲と同じ淡褐色タイルを用いながら、細部にはコンク



安田講堂 前面広場の地下は大食堂になっている



本部棟



法学部4号館



文学部3号館

リート打放しなど現代的手法で調和を追及する、周囲のゴシックに対して新古典主義とも言える端正な建築。特に前者は1階ピロティの中心で、後者との東西軸と北側の法文系教室群を貫くアーケードとの南北軸が交わる工夫は見事と言う他ない。

増改築を2例。工学部1号館（'96 香山寿夫）は正面から左半部が土木工学科、右半部が建築学科の教室。北側背面に5層1スパンを増築、更に中空部ポイドには各層に床を張り製図教室などに活用している。既設のタイル貼り北面外壁はそのまま接続部廊下の内壁として残し、この壁が受け続けていた外光を天空光として取り込む心憎い気配り。学生達のスケッチ演習の人気スポットらしい。この建築家による数棟の新築では斬新なデザインが見られるが、'75年頃話題になった一連の屋上増築は、外装のガルテン鋼が年を経て古色を帯び今では既存部分と完全に一体化している。

工学部2号館（'05 久米設計）は機械工学科の教室で、既設RC4層の北半分を撤去し更に既存部に乗せ掛ける形で12層のS造を増設した大掛かりなもの。安田講堂の北隣に位置し、既設部は同時期の建設のためか講堂と同じ暗褐色タイルの外装。既設の中空部まで取り込んだ階段式大教室は今回の大会のメイン会場になった。上層のアカデミックバレーと呼ばれるアトリウムは今のところ学内では他に見られない大空間で、ここに座っていると何となく一種の高揚感を覚える。外部の上層階の荷重を支える鉄骨斜材は何とも異様で、やり過ぎなのか未消化なのかは知らないが、周囲との調和を考えたとは言いがたい。

増改築を伴う本格的な保存再生は始まったばかり、今後どんな新しい解が産みだされるか、ましてその評価が固まるのは更に何年も先の先、そんな感を強くした見学だった。



工学部1号館外観 右端軒上に見えるのが増築部分



工学部1号館 製図教室



工学部1号館 接続部廊下の元外壁



一連の屋上増築



工学部2号館外部 既設との接続部



工学部2号館 アカデミックバレー

CAMPUS MAP

本郷キャンパス

0m 100m 200m 300m



千代田線根津駅

千代田線湯島駅

至 神田

不忍通り

池之端門

浅野地区

本郷地区

弥生地区

至 千駄木

池田通り

都02
上69

至 御茶ノ水

至 駒込

南北線東大前駅

茶51
東43

農学部正門

至 三田線春日駅

正門

茶51
東43

赤門

茶51
東43

大江戸線本郷三丁目駅

丸ノ内線本郷三丁目駅

至 三田線春日駅

JIA第16回保存問題東京大会資料集より転載

ドバイにみる都市開発と国際市場経済

三好庸隆

(武庫川女子大学生活環境学部教授)
(PPI計画・設計研究所代表)



ここ数年、都市開発・経済関連ニュースなどで、中東の国ドバイの名をよく聞く。そのドバイに、'07年3月上旬、訪れる機会があった。

ジュメイラ海岸沿いを中心に旧市街は別として、まさに360°見渡す限り建設現場とといった感じである。もちろん、局所的には出来上がっているのだが、ビッグプロジェクトは今が建設真っ盛りで、極端に言えば、どのアングルをとってもタワークレーンが10~20本目に入るといっても過言ではない。

そのような中、ビジネスチャンスに吸い寄せられるようにして、ドバイには世界中から有力企業が押し寄せている。企業にとっての最大のメリットは「タックスフリー」だ。原則として法人税（個人については所得税）が無税。関税もなし。

このように中東の貿易・金融・観光の中心として成長が続くアラブ首長国連邦（UAE）は、ドバイを含む7つの首長国からなる。その中核は石油資源の豊富なアブダビが占めてきた。しかし今から6年程前、アブダビ首長のザイト大統領（当時）は連邦国家の安定を考えて、アブダビが政治を主導し続けるのと引き換えに、ドバイが経済開発の主導権を握ることをドバイ首長に提案。アブダビ首長が握っていた石油収入の管理権を半分以上、ドバイ首長に渡した。数百億ドルの資金を毎年動かせるようになったドバイは、傘下の投資会社などを通じて、国内外の不動産投資などを活発にする。周辺国や米欧の投資家を引き付け、高成長路線に乗った（日経新聞'07年3月27日）。



車中から見る大規模開発の様子。

都市点描

「これだけの建物に対して、本当に住む人、ビジネスマンの需要があるのか」といった声が、同行のメンバーから聞かれた。

「何らかの需要があるから、建設している」のであろうが、現地での印象は、「創ること、建てることにより、ドバイへの投資と需要を戦略的に生み出している」という感じである。

ドバイは、美しい海と、欧米・アジアの主要国の人々にとっては珍しい自然である砂漠が有るとはいえ、厳しい夏の暑さ、緑の少ない環境など、普通に考えれば決して良好な生活環境とはいえない。おそらく巧妙なオイルマネーのバランスの上に建設されている都市と見た方が素直であり、それ故のしたたかそうな都市の魅力と、一抹の危うさも感じる。このような巨大かつ集中的な都市建設は、日本でいえば、一時のニュータウンの建設時を思い起こさせる。建設エリアは広範囲におよび、決してコンパクト・シティという言葉はあてはまらないが、それぞれのプロジェクトはかなり高密度で計画されている。

こうした都市創りを、インド、ネパール、パキスタンなどアジアや旧ソ連からの労働者が、文字通り24時間体制で支えている。住民の9割がこのような移住民であるとの統計もあるようだ。移住民が大半を占める国での都市創りの目標は一体何なのか。そしてそれは一体誰のための都市創りなのか。

ドバイのこの急速な都市づくり、まちづくりが、今後、地球温暖化問題やドバイでの石油枯渇問題 一説によるとドバイでの石油埋蔵量はあと15年位と言われており、ドバイのリーダーたち（「ルーラー」（ルールを決める人）という言い方あり）は、石油枯渇後のドバイを睨んだ都市づくりを進めてきている、とのことである などを経て、どのようなかたちで持続可能社会へとソフト・ランディングしていくのか、大変興味深い。好むと好まざるとにかかわらず、グローバル化した国際市場経済社会下のうねりの中に、我国大都市の都市創りも晒されている。このような中で、我国の大都市自治体はどのような都市創り戦略を構築するのか。その指導力、イメージ構築力がまさに問われているのが「今」であろう。



アラビア湾に面する海岸沿いに林立するプロジェクト。未だ入居者、利用者はひとりもない。見える範囲は全て、建設中。



ジュメイラ海岸沿いの幹線道路の様子。



5ツ星ホテルの芝生の広場から見る風景。ホテル滞在者には白人が目につく。従業員は、かなりの人がアジア系。

新入会員紹介

滋賀県	吉岡昌一	吉岡昌一建築設計事務所
兵庫県	橋詰 慎	アトリエ・キューブ建築設計
和歌山県	上野山和男	建築設計事務所カオス
和歌山県	柴本米一	サイモン建築設計室
大阪府	岡部恵一郎	(株)現代総合設計
大阪府	木戸 敏	(株)現代総合設計
大阪府	中島謙一郎	建築工房なかしま
大阪府	森 雅章	(株)安井建築設計事務所
大阪府	山下和源	(株)日総建 大阪事務所

編集後記

梅雨がやっとあがったと思ったら蒸し暑い大阪が戻ってきて、汗かきの私としては辛い季節になってきました。

さて、今回の特集である<建築家資格制度>も、第2ステップへ向けて再構築が進められています。<第三者認定>、さらに<建築家法>の導入に向け、JIAの会員も含め職能として「建築家」を目指す全ての人々が一致団結して行動できるかどうか、この数年が大事だと考えます。今後も広報としてタイムリーに適確な情報の発信を行い、会員相互の交流の一助となるよう活動してまいります。ご支援よろしく申し上げます。

(広報委員 太田恭司)

広報委員会

委員長 小南一郎(大阪)
副委員長 小池啓夫(大阪) 横関正人(大阪)
委員 一尾晋示(大阪) 井上 守(大阪) 大江一夫(兵庫) 太田恭司(大阪)
木戸口浩之(京都) 佐藤洋司(大阪) 佐々木純一(大阪) 柴田敬四郎(奈良)
内藤 正(滋賀) 西濱浩次(住宅部会長) 橋本雅史(和歌山) 森崎輝行(兵庫)
事務局 穴井宏樹 木田明生 緒方英輔
発行日 2007年8月1日(夏号)
発行人 吉羽逸郎
発行 社団法人 日本建築家協会近畿支部
〒541-0051
大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館 TEL06-6229-3371 FAX06-6229-3374
ホームページ <http://www.jia.or.jp/kinki>
メールアドレス jia@bc.wakwak.com

表紙 水墨画「碧 Heki」(大江一夫)